

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370092

研究課題名(和文) 戦後フランスの現代音楽創作・受容から検証する、音楽における冷戦の射程

研究課題名(英文) The Cold War Ideology in Postwar French Music: Its Early Years

## 研究代表者

福中 冬子 (Fukunaka, Fuyuko)

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：80591130

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、冷戦期初期(1944年から1968年)フランスの社会構造が、芸術音楽の創作・受容の諸活動に直接的あるいは間接的に与えた動機の検証するものである。戦後フランスの創作界が親共・反共といった二項対立には収まりきれない、複雑な心理状態の内に自身の音楽創作の道程を創りあげていたという認識を前提に、概して、極度に専門家された音楽創作を巡る記述に収斂されがちな戦後フランス音楽が、実は戦前から続く、より「一般向け」の音楽創作の系譜や、労働者向けの合唱曲の創作などに、いわゆる「前衛系」の作曲家も少なからず関わっていたことをあきらかにし、戦後フランス音楽創作の多様性を示した。

研究成果の概要(英文)：This project is to clarify the socio-political drive behind the creation, dissemination, and reception of early post-war French art music (approximately between 1945 and 1960). The project was prompted by insights gained by my previous research conducted on the research grant from the JSPS that investigated a series anti-communism cultural events carried out by the CIA-sponsored Congress for Cultural Freedom in Europe and their “unfruitful” outcome. The present projects have made it clear that the overall “avant-garde” tendency of post-war French music scenes in fact comprised a mixture of at times conflicting artistic ideologies, of which pro-communism sentiment should never be underestimated/

研究分野：音楽学

キーワード：postwar art music communism ideology

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、冷戦期初期(おおよそパリ開放の1944年から5月革命の1968年まで)における西欧の政治・社会構造が、戦後フランスの芸術音楽の創作・受容の諸活動に直接的あるいは間接的に与えた動機の検証を通じて、戦後の音楽創作にて先導的立場をとってきた作曲家、批評家、演奏家らにより「新音楽/当代音楽」の定義(あるべき姿)がどのように共有され、あるいはどのような経緯で相反するイデオロギーへと分岐したのか、という疑問を端緒とする。より具体的には、1)第二次大戦終戦後、西ヨーロッパ社会における現代音楽の創作とその「史実化」において大きな役割を担ったパリの現代音楽創作・受容状況およびその背後に存在した音楽的・外音楽的動機を、一次資料および雑誌・新聞などに発表された言説等を通じて詳細に検証することにより、大戦後の「新音楽」史の記述において著しくバランスの欠けた考察下に置かれてきた「冷戦」と西ヨーロッパの「現代音楽」との相関関係を再呈示することを目指した。

ヴィシー政権がパリ解放とともに崩壊し、その後音楽院、公共放送局、管弦楽団体等の公的組織の再組織化等を通じて音楽文化構造の立て直しが急ピッチで進む一方、第二次大戦終戦直後のフランスのインテレクチュアル層の間には、「ヴィシー・シンドローム」という言葉に象徴される、占領期政治を巡る「服喪」の揺曳と、新たな世界大戦の憂慮を根拠とする反共産主義政策への懸念との間に板挟みにされた、独特の心理状態が広く共有されていた(Henry Roussio, *Le Syndrome de Vichy*, 1990)。そうした中、国立管弦楽団によるストラヴィンスキー作品の演奏会や、国立放送局による現代音楽シリーズ等を通じて、戦時下には楽譜の入手や演奏が極めて制限されていた戦前の「現代音楽」の諸相が明らかになり始めていたことは、すでに先行研究により、断片的にだが、明らかになっている。他方、そうした現代音楽作品に関する評論等のテキスト内に見出される極めて政治色の強いレトリックには、占領期の音楽文化政策への批判的眼差しが必ずしも一致した因果の認識へと帰結していた訳ではないこと、そしてそうした不一致が、冷戦下には、相反する外音楽的イデオロギーへの分化へと直接的に連鎖していったことが、色濃く反映されている。それらテキストは *Combat*, *Les Lettres françaises* 等、占領期のレジスタンス運動の一環として創刊された新聞、雑誌や、戦後にサルトルらによって刊行された *Les Temps modernes*, および *Noir et blanc*, *Carrefour* などのより一般的な芸術・文化情報に関する記事を掲載する雑誌などに発表されているが、それらはまた、第二次大戦により断絶された現代音楽の「伝統」の再構築作業と、急激に前衛化する当代音楽がその「自律性・抽象性」ゆえに「一般聴者」から

の一層の乖離へと陥ることへの懸念とをどのように折衷させるべきかを巡って、音楽家たちが行き着いた美学的・社会的・技法的結論が、「冷戦」という政治現象に強い作用を受けていることを如実に記録するドキュメントでもある。

しかしながらこれまで、現代西洋音楽通史において「冷戦と文化」という枠組みで語られる音楽活動は、主として、ソ連とその衛星国における文化政策やその帰結に関する記述に限定されてきた。他方、冷戦と西欧の音楽創作および受容を巡るこれまでの事例研究においては、一部の伝記研究での言及を除き、そのほとんどが「文化的自由の為の会議」(反共産主義に根付く「文化と思想の自由」)を播種する目的の下に活動を繰り広げ、CIAからの秘密裏の資金供与をその資源とした1950年設立の多国籍民間団体。以下「会議」と略称)に関するもの、あるいはその派生的研究であり、それらの研究を通じては、戦後15年ほどの間に急速に播種されやがて飽和状態を迎えることとなる「トータル・セリー音楽」の創作美学は「会議」の諸活動に支えられたが故に維持されていたという認識が、ここ10年ほど定着してきている。だが、2011年度～2013年度にかけ、科学研究費助成基盤研究(C)で研究代表者が行った調査・研究では、「会議」の活動が「トータル・セリー音楽」の創作美学に与えたインパクトは大きくなく、また「会議」側の活動も、綿密に構築されたストラテジーの帰結というよりも、「会議」内の上席委員と作曲家との直接的・個人的な繋がりや、その時々における諸事情に基づく短期的展望から派生したものであることが明らかになった。

## 2. 研究の目的

以上を受け、本研究では、1944年から60年代後半にかけてのパリの現代音楽界において、創作・受容の立場にて一定の影響力を持っていた作曲家、評論家、演奏家の活動および言説、そしてそれらの人物と彼らの音楽的・外音楽的思想の醸成上重要な役割を担った非音楽家との関係性を示唆する資料、および当時の演奏会や放送番組の記録等の資料の包括的な調査を通じて、大戦後四半世紀の現代音楽史を我々に呈示している線的な「物語」が、実は多くの矛盾を抱える政治的・美学的イデオロギーの相互作用を内包するものであるという事実の呈示を、究極の目標とした。とりわけ、そうした「矛盾」の多くが、作曲行為に先立つ創作思想と実際の楽曲の音が表すものとの乖離のみならず、作曲家が奉じた創作美学と政治イデオロギーとの間にしばしば存在した非両立関係に依拠し、またそれらが当代の政治構造そのものに強い作用を受けていた旨を呈示することで、これまでは「発展」と「反動」という二項対立の原理の反復を内包する大戦前の音楽創作の延長線上において記述される傾向にあった

「戦後当代音楽」の再構築を試みるものである。とりわけ、本研究を通じて以下の点を意識して資料の検証作業を行った。

1. 第二次大戦後のパリにおいて、戦中期には断絶されていた「20世紀現代音楽」の事実関係が徐々にその諸相を現し始めた時、セリー音楽や新古典主義音楽、あるいは神秘主義音楽などの諸系譜が、どのような政治的イデオロギー上の文脈付けを通じて差異化されたか。
2. 1944年から60年代後半にかけてのパリの知識階層においては、どのような領域横断的な思想が共有され、またそれぞれが冷戦構造からどのような作用を受けていたか。
3. 戦後の新音楽の方向性を決定づける上で重要な役割を果たした作曲家、音楽評論家、演奏家はそれぞれ、どのような思想上の立脚点から冷戦構造に向き合っていたか。

具体的な言説調査において、音楽家ルネ・レイボヴィッツ(1913-72)、セルジュ・ニグ(1924-2008)、シャルル・ケクラン(1867-1950)、非音楽領域ではジャン＝ポール・サルトル(1905-1980)、ジュリア・クリステヴァ(1941-)等を検証対象とした。例えば、作曲家であり指揮者としても活躍したレイボヴィッツは、戦後ヨーロッパ音楽創作界における戦前セリー音楽の播種に寄与した第一人者であるが、サルトルとの深い交友関係ゆえに、前述の自身の活動をサルトルの「コミットメント *l'engagement*」概念(芸術作品を通じて表せられるべき、芸術家による社会・政治的問題への専心)に則って文脈付けすることに腐心していたことは、現代音楽史記述においてほぼ看過されてきたと言ってよい。サルトルとの思想上の齟齬は垣間見られるものの、*Les Temps modernes* 誌に執筆した記事や自著『芸術家とその良心』(1950)内でのサルトルとのやり取りは、第二次大戦終戦直後にパリから急速に西ヨーロッパ全土に広まっていった戦前のセリー音楽を、決して単なるいち創作技法ではなく、むしろ強い外音楽的動機に支えられたひとつの美学として再文脈化し、また、戦後セリー音楽がそれほどまでに「自律性」を標榜する音楽としてドグマ化される結果に至った理由を逆説的に説示するものと言える。

### 3. 研究の方法

研究代表者は2008年度科学研究費助成奨励研究「<文化的自由のための会議>から考察する、冷戦期現代音楽における外音楽的レトリック」(課題番号20901007)および2011年~2013年度科学研究費助成基盤研究(C)「<文化的自由の為の会議>から検証する、現代音楽における『政治性』」(課題番号23520159)において、冷戦期に反共産主義的思想のもと「文化的自由」の播種を目的として<文化的自由のための会議>が展開した

活動を手がかりに、戦後現代音楽創作・受容と冷戦構造との関係性を調査・研究したが、本研究は基本的にそれらの研究の延長線上に位置する。他方、本研究では研究対象を、大戦後西ヨーロッパ社会における現代音楽の創作およびその「史実化」において大きな役割を担ったパリに焦点をしばり、現代音楽創作・受容状況とその背後に垣間見られる外音楽的動機、およびその現場における思想形成に大きな影響を与えた左派系現代思想の立役者と当時のパリの現代音楽シーンの引導者との関係性を詳細に検証することで、大戦後の「新音楽」史の記述において著しくパランスの欠けた考察下に置かれてきた「冷戦」と西ヨーロッパの「現代音楽」との相関関係を呈示し直すことを目指した、年次毎の研究内容は以下の通りであった。

### 2014年度

初年度はこれまでの研究・調査結果を整理したうえで、第二次大戦終了直後から約20年の間のパリの音楽創作・受容状況を精査するため、2度にわたりパリでの資料調査(フランス国立図書館、マラー音楽資料館)を行った。調査した主たる資料は以下のとおりである。1)西側主導の反共産主義的文化プログラムの受容状況を示す新聞・雑誌記事および関連プログラムの資料等、2)終戦直後のパリ音楽界において一定の発言権を持つていた作曲家、批評家(ケクラン、ニグ、ブーレーズ、ロリオ等)の活動を示す資料(演奏会プログラム、雑誌・新聞記事、著作等)、および3)ニグが、親ソ連諸国の音楽家・批評家が出席して開催された第二回国際作曲家。批評家会議を受けて創立した親共音楽家協会「コラル・ポピュレール」関係の資料(楽譜、プログラム等)。

またこの現地資料調査に先駆けて、パリ占領中に開催された音楽会に関する二次資料の読み込みを行った。たとえば Michèle Alten は著書 *Musiciens français dans la guerre froide* (Paris: L'Harmattan, 2000)の中で、この時期の音楽活動に冷戦期フランスの音楽文化の布石を敷いた役割を与えているが、本研究も、戦前・戦後の音楽創作・受容状況をひとつの流れの中に位置づけることで、それを背後から支えた外音楽的動機を解明することを目指したという意味で、同じ目的を持つ。上記の先行研究にはほかに Leslie Sprout, Nigel Simeone らが、断片的にはあるが同時期のフランスの演奏会状況について研究を発表しており、それらも参照した。また同時期の西ヨーロッパ全体における現代音楽創作・受容に関する主要先行研究(Michael Hochgeschwender, *Freiheit in der Offensive?* 1998, Inge Kovacs, *Im Zenit der Moderne: Die Internationalen Ferienkurse für Neue Musik Darmstadt*, 1997等)も参照した。

また本年度は2本の学会発表を行った。そのどちらも米国作曲家の創作を主たる対象

とした研究だったが、アプローチとして背景に冷戦期文化構造をおいたため、本年度パリで行った資料調査の成果が部分的に用いられた。

#### 2015 年度

第2年度は、前年度より引き続き、ルネ・レイボヴィッツ、セルジュ・ニグ、シャルル・ケクランを中心に、第二次大戦後フランスの思想界と現代音楽創作がどのように交差したのかを以下の資料を通して検証した。1) *Les Lettres Francaise*、*L'Humanite*、*Les Temps modernes*、*Tel Quel* およびその後継誌である *L'infini* などの雑誌、新聞中の記事(とくに作曲家による批評記事やレポート)、2) 上記の作曲家に関する一次資料(所蔵元: フランス国立図書館リシュリユー館、マーラー音楽資料館)、および 3) 関連領域の先行研究、を入手し、検証した。この内 1) に関しては、ほぼすべてが日本で入手不可能なアイテムであり、2月に2週間にわたっておこなったパリでの現地調査(於: フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館)中にマイクロフィルムを閲覧・複写できたのは非常に大きな収穫だった。とりわけ、フランス進歩音楽家協会 *L'Association française des musiciens progressistes* および人民音楽連盟 *La Federation musicale populaire* 関連資料(記事、プログラム・ブック等)の入手は大きかった。この調査を通じてある程度明らかになったのは、たとえば「親スターリン主義」などの根本的な姿勢はあるものの、掲載されるエッセイや記事、批評はその内容やイデオロギーに開きがあり、その「開き」はたとえば1968年の5月革命においても、「革命自体にはエンファティックだが、革命における音楽の使用には反対」など、多数の齟齬を含み得るものであるということである。2)に関しては、これまでの音楽史記述において極めて周辺的に位置づけられてきたケクランが、大戦後の創作界におけるイデオロギー上の不協和音が出る際の「セクト性」構築に、戦前期大きな役割を担ったということが明らかになった。本年度はこれらの研究結果を発表する機会はなかったが、次年度前半(7月ソウル)および後半(3月東京)に予定していた国際学会での発表(フリーペーパー発表およびシンポジウム発表)にむけて、検証した資料のとりまとめに着手した。ルネ・レイボヴィッツ、ピエール・ブーレーズ、セルジュ・ニグを中心に、大戦後パリの現代音楽創作・受容の方向付けにおいて重要な役割を担った音楽家の一次資料を中心に研究・調査をすすめた結果、彼らは政治イデオロギーにおいては互いに相容れない立脚点を持ち、論文やエッセイ、レクチャー等を通じてそれらを声高に申し立ててきたが、他方、戦前の現代音楽の系譜を大きく読みかえ、その作業を通じて戦後現代音楽創作のあるべき姿を一貫して追求し続けたことがあきらかになった。そうし

た彼らの音楽創作における技法的・美学的・外音楽的意思決定がどのような経緯で形成されていたのか、主に書簡やメモ、原稿等の検証を通して考察した。

#### 2016 年度

第3年度は当初、前年度からの取りこぼしの処理として、パリ(国立図書館)およびバーゼルのパウル・ザッハー財団での資料調査を予定していたが、2017年度にアジア圏では初の開催となった第20回国際音楽学会の実行委員および開催校(東京芸術大学)での運営事務作業を一手に担い、その膨大な準備作業の煩雑さから、予定していた海外出張はキャンセルとせざるを得ない状況になった。代わりに、前年度までに収集した資料を解析し、そこから得られた知見を基に、7月にソウルで開催された「国際美学学会」での研究発表、そして2月に招聘事業として行ったニュージック・フロム・ジャパン(ニューヨーク)主催シンポジウムでの基調講演へと盛り込んだほか、前述の、3月の国際音楽学会でのフリーペーパーおよびシンポジウムでの発表では、非常に有意義なフィードバックを得ることができた。

#### 2017 年度

最終年度に終了することができなかった調査を実施するため延長した結果、2018年度3月にパリ(マーラー音楽資料館)およびバーゼル(パウル・ザッハー財団)に赴き、なるべく資料調査をすることができた。マーラー音楽資料館では、戦後数年間、フランスの「左翼」音楽家の先峰的立ち位置を占めたシャルル・ケクラン関係の資料(プログラム・ノート、レクチャー用原稿、私信など)の調査を行った。すでに前前年度の報告で述べたとおり、パリ解放(44年)から約10年に亘るフランス音楽創作は、短い周期で入れ替わった美学的方向付けや「前衛」音楽の有り様、あるいは作家と聴衆との関係性などに下支えされ、非常に複雑な様相を呈しているが、その中で、「前衛」の探求と「音楽の象牙の塔化」の否定の間で大きく揺れ動くこととなった、親ソ(=反米)アーティストの立ち位置もまた非常に複雑かつ多様な動機に支えられている。その実態のドキュメントとしての、雑誌・新聞記事、音楽祭、レクチャーなどもまた、時に個人個人の政治的信条と、新たな音楽創作技法の追求との間で、時に矛盾を呈する発言をすることとなるアーティストの姿を如実に顕すことが明らかになった。とりわけ、興味深いのはルネ・レイボヴィッツの例だが、こちらの一次資料に関しては、パウル・ザッハー財団で未発表のノートや書簡などを入手することができた。

#### 4. 研究成果

年次ごとの研究成果は以上に記した通りであるが、全体として以下の本事業の成果と

して挙げることができる。

1944年から60年代後半にかけてのパリの現代音楽界を巡る歴史記述では、個々の作曲家・音楽家の伝記研究を除き、主として「創作技法・創作言語」の「発展史」として示されてきた。その結果、「前衛的・進歩的」創作からこぼれ落ちてきた作品は、歴史記述上、第二義的なものとして位置付けられてきたが、そうした偏った理解の弊害については今更語る必要はないであろう。他方、音楽史を社会史の一部として考えてきた時、そうした自律的音楽創作のみならず、ある種の機能を付された音楽作品もまた、当時の創作意思を再構築する際には非常に重要であるが、本研究はニグ、レイボヴィッツ、ケクランなど「現代音楽史」からはこぼれ落ちてきた作曲家が、実は、ある面ではブーレーズらと美学を一にし、ある面ではまったくことなる社会イデオロギーに支えられた動機を持っていたことを、彼らの記述や活動記録を基に精査したもので、冷戦初期、つまり共産主義が目指していた(とされる)ところの「人民のための音楽」と、それに真っ向から対峙する「自律音楽」との拮抗が、実際にどのような様相をおび、どのような活動を必要としてきたかが明らかになった。また、これら調査を通じて、大戦後四半世紀の現代音楽史を我々に呈示している線的な「物語」が、実は多くの矛盾を抱える政治的・美学的イデオロギーの相互作用を内包するものであるという事実が呈示されたことは大きな成果といえる。とりわけ、そうした「矛盾」の多くが、作曲行為に先立つ創作思想と実際の楽曲の音が表すものとの乖離のみならず、作曲家が奉じた創作美学と政治イデオロギーとの間にしばしば存在した非両立関係に依拠し、またそれらが当代の政治構造そのものに強い作用を受けていた旨を呈示することで、これまでは「発展」と「反動」という二項対立的原理の反復を内包する大戦前の音楽創作の延長線上において記述される傾向にあった「戦後当代音楽」の、新たな再構築の可能性が提示されることとなった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

1) 福中冬子 2018 「リチャード・タラスキンの業績」、『音楽現代』3巻、135～141頁。査読なし。

2) 福中冬子 2017 「書評：Olivia Bloechl, Melanie Lowe, and Jeffrey Kallberg 編 Rethinking Difference in Music Scholarship」、『音楽学』第63巻2号、151～153頁。査読有り。

3) Fukunaka, Fuyuko. 2017. "World Music History and Interculturality: Toward Recontextualizing Post-War Japanese Avant-Garde Music." *Aesthetics of*

*Interculturality in East Asian Contemporary Music. The World Music (New Series)*. Vol. 6, number 1. 59-72. 査読あり。

[学会発表](計7件)

1) Fukunaka, Fuyuko. 2017. "Entangled Histories of Music: Narrating International Avant-Gardism after 1945." Symposium lecture. The 20th Congress of International Musicological Society. Tokyo University of the Arts. March 22.

2) Fukunaka, Fuyuko. 2017. "Music of the Left?": Schoenberg, Leibowitz, and the "Artist's Conscience." Free Paper. The 20th Congress of International Musicological Society. Tokyo University of the Arts. March 21.

3) Fukunaka, Fuyuko. 2017. "Multi-culturalization in Contemporary Japanese Music (Or: Japanese Composers, Japanese Authenticity)." Keynote Lecture. Music from Japan (NY, USA). Feb. 18. 招待講演。

4) Fukunaka, Fuyuko. 2016. "Reexamining the "inter" in the "interculturality" in the postwar avantgarde music in Japan and the US." The International Congress for Aesthetics. Seoul National University. July 28.

5) 福中冬子 2015 「音楽批評における世論と輿論」、『文化庁助成事業アートマネジメント支援事業 音楽批評に何ができるか』(主催：お茶の水女子大学) 於：大阪ナレッジキャピタル、1月5日。招待講演。

6) Fukunaka, Fuyuko. 2014. "Whom Are We Really Listening To?: Re-examining the "I" in Musical Works." Keynote Lecture. Post-Graduate Musicology Forum. University of Tokyo. Nov. 22. 招待講演。

7) 福中冬子 2014 「ミニマリズムとリベラリズム:歴史批判的検証」、『日本音楽学会全国大会』 於：九州大学大橋キャンパス、11月8日。

[図書](計2件)

1) Fukunaka, Fuyuko. 2015. "Japan." *Lexikon Neue Musik*. Edited by Jörn Peter Hiekel and Christin Utz. Kassel; Bärenreiter (ISBN-978-3-7618-2044-5). 322-325. 査読なし。

2) Fukunaka, Fuyuko. 2014. "Redefining Japan's Postwar Avant-Garde Through Redefining Cage." *Contemporary Music in East Asia*. Edited by Oh Hee-sook. Seoul: Seoul National University Press. 181-211. 査読なし。

[産業財産権] 該当項目なし

6 . 研究組織

( 1 ) 研究代表者

福中冬子 ( FUKUNAKA, Fuyuko )

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：80591130

( 2 ) 研究分担者

なし

( 3 ) 連携研究者

なし

( 4 ) 研究協力者

なし